

仏の願い

平成 27 年 西雲寺だより 春号（41 号）

5 月 30 日(土) 10 時より

10:00	前住職 23 回忌 前坊守 17 回忌	石川	いちらく まこと 一楽 真師 大谷大学教授	
12:00	おと き			
1:30 ～ 4:10	浄土真宗 布教大会 「他力の救い」	熊本	おおたに よしふみ 大谷 義文師	
		大阪	かつべ まさのり 勝部 正典師	
		大阪	かどかわ たかし 門川 崇志師	
		奈良	かわばた さとる 川端 覚師	
		石川	いちらく まこと 一楽 真師	

バスが出ます ご利用下さい 	放送会館 8:50 発 → 東別院 → 工大前 → 安田・本堂・末	帰り 4:20 発 
	常 森 9:00 発 → 鮎川 → 小丹生 → 畠中	
	坪 谷 9:00 発 → 西別所・宿堂・大矢・風尾	

お誘い合わせて にぎやかに お参り下さい

浄土真宗の歴史

本願寺の成立

親鸞聖人がなくなられて十年の歳月が流れた。その間、聖人のお墓は、東山の延仁寺の近くにある共同墓地である鳥辺野の地大谷に、十年前と同じようにひっそりと立ったままであった。四角の壇を構えて、四角の柵で囲んであった。関東の同行達は、聖人滅後しばしば京都にのぼっては、このお墓の前にひざまづいては涙し、聖人の遺徳を偲んだのでした。

しかし、あまりにも粗末なもので、関東の門弟たちは、聖人の末娘、覚信尼の再婚相手、小野宮禅念より土地を譲り受けて小さなお堂を建ててお墓を移した。当初は堂内に石塔だけが建っていたが、二十年後に親鸞聖人の影像（お木像）を安置した。

覚信尼はこの廟所の地を門弟の共有地として、関東の門弟たちに寄進し、廟堂の管理（留守職）には覚信尼が当り、以後はその子孫が関東門弟の承認をえて就任することにした。

そして、廟堂の管理の費用や留守職の生活の面倒は関東の門弟たちが負担することとした。

覚信尼の没後十八年間は、廟堂は安泰でしたが、覚信尼の先夫日野広綱との間に生まれた長男覚恵と、再婚相手の小野宮禅念との間に生まれた唯善との間に留守職をめぐる争いが起き、関東門徒の不信をかってしまいました。

やがて覚恵の長男覚如が留守職につくと関東

の門弟たちはこれを許しませんでした。

親鸞聖人の影像の前で、静かに遺徳をしのぶうとした関東門徒は、留守職をめぐる争いや、廟堂を寺院化しようとする覚如の野望にその敬慕の念がさまたげられたのです。大谷の廟所は関東の門徒たちにとつて、あくまで親鸞聖人のお墓であつて、時々上京して聖人の遺徳をしのぶところであつたのです。そして、大谷家の人々には留守職として廟堂のお守りをしていただきたいという思いのみだったのです。

覚如上人は留守職を継承すると、三代伝持の血脈を表明し、廟堂の寺院化をこころみます。

三代伝持の血脈とは、仏法の法灯を身体の血筋が親から子へ、子から孫へと受け継がれることに喩えたもので、浄土真宗の正しい教えが、法然・親鸞・如信（親鸞聖人の長男善鸞の子）の三代にわたつて伝えられたことをいいます。そしてそれは如信から覚如に継承されることを意味します。

やがて覚如は大谷の廟堂を本願寺と称し、私こそがその責任者であり、代表者であるとその立場を表明されたのです。

ここに関東は関東、京都は京都で各々独自の道をまいりましよう、関東の同行たちと京都の本願寺の縁はぶつりと切れてしまったのです。それまで関東の同行から送られてきた懇志も途切れ、参詣する人もなく、本願寺は経済的にも困窮し、さびさびとした状態となつたのです。

当時の古記録に本願寺は「人跡絶えて、参詣の人一人も見えさせ給わず、さびさびとすみておわします」のに対して仏光寺は「人民雲霞の如く」であつたと記されています。

門徒集団の動き

親鸞聖人なきあと、有力な門弟を中心とした門徒集団はそれぞれ布教活動をし、教線を延ばしていきました。その中でも有力な門徒集団は真仏を中心とした高田門徒、順信を中心とした鹿島門徒、性信を中心とした横曽根門徒あります。

そのなかでも常陸（茨城県）には、横曽根門徒を要するもつとも有力な門徒集団が形成されていきました。しかし、京都の廟所で覚如と唯善が留守職をめぐる争いがおき、横曽根門徒は唯善の側につき敗訴したため、勢力は衰えていきました。

横曽根門徒に代わつて関東の教団の中心になつたのが、真仏を中心とする下野（しもつけ・栃木県）の高田門徒でした。聖人が関東教化の折、善光寺如来を感得し、これを本尊とし如来堂が建てられたのが始まりです。如来堂はやがて高田専修寺（せんじゅじ）と呼ばれ、寺院としての威容を整えていきました。高田門徒の教線は関東をはじめ、東北から東海地方まで広がり、初期真宗教団の主流となりました。

仏光寺は鎌倉で布教活動をしていた高田門徒で明光の弟子の了源によつて教線を延ばし、京都の山科に興正寺を建てたのが始まりです。

了源は本願寺の覚如上人の長男存覚に教学を学び「光明本尊」「名帳」「絵系図」といった独自のものを使って布教活動に当り、その教線は、近畿は勿論、中国、四国にまで及び、その勢力は本願寺をはるかにしのぐものとなりました。

「光明本尊」は南無不可思議光如来の九学名号を中心に、その光明のなかに、親鸞聖人や七高僧、その他善知識の姿を描き念仏の教えの伝統を一幅の軸にしたのも、「名帳」は念仏の教えをいただいた師弟の関係を系図の形で示した名簿「絵系図」は「名帳」の人名にそれぞれの肖像をつけ加えたもの、これらは門徒教化に大いに役立ったようで、人々が群参したといわれています。

蓮如上人

親鸞聖人がなくなつて一五四年後蓮如上人（幼名 布袋丸ほていまる）が誕生した。しかし母親は父親、存如の正室ではなかったため、蓮如上人が六歳のとき、父、存如が正室を迎えると母親は「和子の一生に、この本願寺を再興したまえ」と諭し、本願寺を出て身を隠してしまつた。蓮如上人にとつて母親との今生の別れとなつてしまつたのです。

しかしこの母親のことばが、蓮如上人の一生を左右したものと思われまふ。それ以後の蓮如上人は世間の常識にたがわず、継母、如円のもとで育てられることになりました。経済的に困窮した本願寺にあつて、蓮如上人は幼少の頃から苦しい部屋住み生活を余儀なくされたのです。十五歳のとき、同じ真宗教団でありながら、下野高田の専修寺や、京都、仏光寺の繁栄に比べ、本願寺のあまりのさびれように愕然とし、生涯を“本願寺再興”にささげることを決意したといひます。

このようなどん底の困乏生活のなか蓮如上人は独学で、親鸞聖人の書かれた『教行信証』や

その註釈書である存覚の『六要鈔』などを中心に懸命の勉強に励まれました。それが後の蓮如上人の布教活動や『お文』八十通となつて結実するのです。

蓮如上人の部屋住み生活は四十三歳まで続きましたが、四十三歳のとき、父、存如がなくなり、跡継ぎ問題が起きました。当然、長男の蓮如上人が本願寺を継ぐべきでありましたが、父、存如の正室、如円尼が我子応玄（おうげん）が継ぐべきだと主張しました。

それに異をとねえたのが、蓮如上人の叔父、如乗でした。如乗は越中（富山県）井波の瑞泉寺の住持で、北陸地方の本願寺の重鎮でした。如乗は蓮如上人の才能を見抜かれておられたのでしよう、蓮如の正当性を主張し、本願寺八代を継承することになったのです。

蓮如上人が継職するまでは本願寺は比叡山の天台宗の末寺であつたので、天台色が色濃く残つていましたが、それらのものを一掃し、浄土真宗に相応しいお荘厳や、お勤めの形式を定められました。そして本願寺の貴族的なしきたりを廃し、門徒とは平座（ひらぎ）で膝をつき合わせて語り合いました。そして門徒こそ如来聖人の大切なるお客入だからかしづくように申された。

蓮如聖人は守山や堅田など江州（こうしゅう）の湖南、湖西を中心に精力的に布教活動をされました。堅田の町はまことに不思議な町であつた。応仁の乱前後、約二百年間にわたつて、京極、佐々木の両大名にも屈せず、比叡山とも対等の力を維持して、湖上の権利を一手ににぎつて、水軍を組織し、一方では日本海方面に盛んに商売をして、財政的にも繁栄し、町民独自の力で

町を治めていたのである。

この町が本願寺の江州における最大、最強の拠点となつたのである。堅田の町民はこぞつて蓮如上人に帰依し、経済的にも本願寺を支えたのである。金森道西（どうさい）と堅田の法住（ほうじゅう）は特に蓮如上人を支えた有力門徒で、堅田の法住は、堅田海賊の親分で、商売は紺屋の総元締でありました。

本願寺破却と吉崎御坊

こうした蓮如上人の努力の結果、本願寺はその勢力を拡大していった。

しかし勢力が増大するにつれて、比叡山をはじめとする旧仏教の反発を招き、寛正六年、上人五十一歳のとき、本願寺は比叡山の宗徒によつて破却されました。蓮如上人は近江の堅田に難を逃れましたが、その後も迫害が続いたため越前に移り、文明三年、上人五十七歳のとき吉崎に坊舎を構えて、ようやく落ち着くことができました。

吉崎において教線は一挙に拡大し、北陸地方はもとより、越後や信濃、東北地方まで伸び、わずか一、二年で多屋と呼ばれる間法や宿泊のための施設は二百にも及びました。

しかし、三年目には周囲の状況は大きく変わり、加賀国の守護富樫政親と弟の幸千代との間に戦が起こり、本願寺の門徒も政親に味方して一揆を起こしました。蓮如上人はそれを押さえることができず、夜半に小舟に乗つて小浜に退去せざるをえませんでした。

（住職）

先日、じいちゃんとばあちゃんが亡くなりました。

じいちゃんが末期の肺癌で入院してから、休みの日や仕事帰りに病院に行き、一緒にお菓子を食べたり、テレビを観たり、つらい治療だったはずなのにじいちゃんはいつも笑ってくれました。

自宅に戻ってから何度も会いに行き、仕事帰りの時は「早く帰ってご飯食べね」と私の心配をしてくれて、いつも優しいじいちゃんでした。

いつも通り仕事帰りに行くと、ばあちゃんが、「今日病院に行ったら、すい臓がんって言われた」と私に言い『ばあちゃんまで…』とショックでした。

しばらくして、ばあちゃんが入院して、休みの日や仕事帰りに何度も会いに行きました。元気のない姿を初めて見ました。「毎日たくさんの方が会いに来てくれるのはもう死ぬってことか？」と私に聞くのですが「大丈夫やって」としか言えない自分は無力なのだと思います。会いに行ったり話したり、今しか出来ない事をたくさんしたつもりでいたのに、11月27日、仕事帰りに行くと、個室に変わり前日とは全く違う姿でした。『もっと話せばよかった』と後悔しました。その次の日に、ばあちゃんは亡くなりました。覚悟していたはずなのに、後悔や寂しさや『なんでばあちゃんがこんな早く死ななあかんのや。』と悔しくて、書いている今も涙が出てきます。

その後すぐ、じいちゃんの自宅での介護が始まりました。いつも笑っているじいちゃんが「痛い」「辛い」と言うと、相当なものだと思い、痛みが少しでも和らぐようにマッサージもたくさんしました。その頃から、心配して「早く帰りね」と言っていたのに、「また来てな」と言ってくれるようになって、すごく嬉しかったです。

1月11日の朝、家に行くと家族に囲まれて、弟の成人式のスーツも見れてとても嬉しそうでした。お昼に「夕方もう一度来る」と約束して帰り、夕方に行くと、相撲を見ていました。相撲の話をしたり、大阪で相撲を観た話もして、いちごといよかん、おかき食べて、いつものように過ごし、寝る部屋に行きました。手をマッサージしたり、肩を揉んだりして、「何かしてほしい事ないんかあ〜？」と聞くと「仏壇に参る」と言ったので、いとこのお母さんとじいちゃんを仏壇の前に運び、じいちゃんはお参りをしていました。今思うと自分の死を分かっていたかのように不思議です。そして「ひげ伸びてきたで明日そってあげよっか？」

と聞くと嬉しそうに笑って頷いていました。「明日はなににもないから、朝から夜までいる。ひげそるから待っててね。おやすみ」と言って帰りました。その1時間半後に亡くなりました。あまりに急で『明日約束していたのに…』とすごく悲しかったです。たくさん話したつもりでも、もっと話せばよかったと思います。

後悔もあるけど、楽しい思い出がたくさんあるので、ずっと忘れないです。じいちゃんもばあちゃんもたくさんの人に愛されていて、たくさん愛してくれた事、自分が死ぬときに楽しかったと思えるように過ごしたいと思った事、そして私の父が看病している姿を見て本当にすごいなと思った事、じいちゃんとばあちゃんの死で、たくさん感じる事がたくさんありました。

尊敬できる人が周りにいる環境を誇りに思う事や、感謝の気持ちを忘れずに生きていきます。ずっとずっと自慢の家族です。じいちゃん、ばあちゃん、ありがとう。

どうかこの気持ちが届きますように。

桃江（22歳）

胸と



びょうし 病・死

じいちゃんとばあちゃんが、かんと闘って生きている姿を見て、病気の恐ろしさと生きる力強さを学びました。痛くても我慢するじいちゃん、ばあちゃんから元気を奪ったがんの痛み、とても痛くて辛かったと思う。

自分が健康で呼吸をしたり、食べることが出来ることはとても幸せであることを学びました。また、やはり別れというものは辛いものです。

自分と関わっている人全ての人に対して、感謝の気持ちをもって生活していきます。

また、立派な一人前の看護師になって、病気で苦しむ人の支えになれるように勉強頑張ります。

旭（20歳）

ガンが見つかり、入退院を繰り返しながら、病と闘っていたじいちゃん。口数の少ないじいちゃんは、お見舞いに行っても特に話もなかったけど、帰る時には必ず病棟の駐車場が見える大きな窓から、私が見えなくなるまでずっと手を振ってくれました。そんなじいちゃんに、いつも元気をもらっていました。

みんなでガンと闘っていた時、突然ばあちゃんが末期の膵臓ガンと診断されました。膵臓ガンは自覚症状が出る頃にはもう手遅れと言われており、ばあちゃんもその一人でした。2人共ガンという病に侵され余命宣告を受けた私の父は、本当に辛そうでした。

普段、厳格で弱音を吐く姿を見た事ない父の姿を見るのが、何よりも辛かったです。それでも、毎朝、毎晩欠かす事なく、じいちゃんの家と病院を行き来し、看病している父は本当にすごいと思います。私にはとても出来なかったと思います。

口数の少ないじいちゃんに比べて、ばあちゃんはとても弱気で、初めの頃は泣いてばかりでした。病気を少しでも忘れてもらえればと、昔の話をしたり、料理のレシピを教えてもらったり、2ヶ月間本当に色んな話をしました。

4月に結婚を控えている私の花嫁姿を誰よりも楽しみにしていてくれたばあちゃん。「ばあちゃんが、ご飯も、掃除もしてあげるで」「子供が生まれたら面倒みてあげるで」と楽しそうに話すばあちゃんの姿が、頭から離れません。何ひとつ叶えてあげられなくて、本当にごめん。

ばあちゃんが死んでから、じいちゃんはよくばあちゃんの話をする様になりました。ばあちゃんのニット帽を見つけてかぶっているじいちゃんが大好きでした。口数の少ないじいちゃんが、ある日の帰り際、「また来てな」と、ひとこと言ってくれた時、本当に嬉しかったです。本当に、じいちゃんとの時間は癒しでした。

そんなじいちゃんも居なくなり、2ヶ月の間に父母を亡くした父は本当に辛そうでした。あんなにも一生懸命看病し、尽力していた父が2人の最期の時に「何もしてやれなかったな、ごめんな」と言って涙を流す姿は忘れられません。

私も父の様に、もっともっと家族を大切にします。じいちゃん、ばあちゃん、沢山の愛をありがとう。2人との1日1日の思い出を大切に、今ある家族と過ごしたいです。

あかり (24 歳)

2014 年、2015 年と、私は大好きなじいちゃん、ばあちゃんを亡くしてしまいました。

私のばあちゃんは料理が得意で、いつも家の玄関のところに、煮物やたくあんなどたくさんの料理を、毎日のように持って来てくれました。しかし、腹痛を訴えて病院に行ったところ、末期のすい臓がんと言われました。毎日病院に行って、たくさん話をして、あたりまえのようでした。しかし、数日ぐらいたっただけで、容体が急変してしまい、優しいばあちゃんが亡くなって、とっても寂しかったです。

じいちゃんもガンとたたかっていて、訪問看護をしていました。冬休みの3日間、じいちゃんと一緒にいて、訪問看護の人にとってはとても優しくて、じいちゃんも一緒に話しているのが楽しそうでした。将来、じいちゃんみたいな人に介護をする、「訪問看護師」になりたいと思いました。いつも大きな声で笑っているじいちゃんがいなくなるのは、とても寂しいです。

今までのじいちゃん、ばあちゃんを振り返ると、ガンとたたかっていて、点滴もしていてつらかったと思うけど、私達の前ではいつも笑って、前向きに頑張っていたじいちゃんとばあちゃんは誇りに思います。私達はいつも当たり前のように呼吸をしています。じいちゃん、ばあちゃんが辛いのに必死に頑張って呼吸をしているのを見ると、これが生きるということだと分かりました。

私のじいちゃんとばあちゃんは、たくさんの人に愛されていて、私の自慢です。

私はこれからもじいちゃん、ばあちゃんのように皆に愛される人になり、前向きに頑張りたいです。そしてじいちゃん、ばあちゃんの分までどんなことでも一生懸命頑張りたいです。

千広 (12 歳)

若い



しょう ろう
生・老

母の思い出

― 七回忌を終えて ―

福井駅集合のハガキを出して、一人の欠席者もなく皆さん集まっていたいただき、早々に人数確認を取って列車に乗りました。

列車に乗ってから、皆んな久しぶりなので、色々話しっぱなし。福井を出てから宇奈月温泉の駅まであつという間でした。

「福井駅集合のハガキ」では何のことかわからなかったと思います。実は、母の七十七歳の喜寿を祝うため、一泊二日で宇奈月温泉に行くことにしたのでした。

母の兄弟妹夫婦、娘たち、そして私達も揃って旅行に行くのは初めてです。母は出不精でしたので、それも何とか説得して、宗兵エの姉さんや京都の姉ちゃんや前田の母さん、仁右エ門の姉ちゃんや大味の姉ちゃん、吉田父さん母さん（金沢）も一緒にでした。宴会の前に、もう話は盛り上がり、仁右エ門うんさん、大味のうんさん等と大浴場へ。気持ち良く、ゆったりとした気分に入っている姿が、目に浮かびます。

宴会場では、話に花が咲き、カラオケなども大変賑やかでした。

「島田様御一行団体様」（大広間の看板）

その横に二枚の小さな看板。

「喜寿のお祝」

娘である都（みやこ）が花束を贈呈。白い花でした。母の照れくさい顔が思い浮かびます。

「ひ孫のお祝い」

ちょうどひ孫が生まれた年で、皆んなに披露するのだと、喜寿のお祝いとひ孫披露とを兼ねておりました。母が、ひ孫を抱いて正面に座っている写真は、嬉しそうでした。そのひ孫も、今や高校一年生です。早いですネ。

あくる日は能登島めぐり観光をして、楽しく別れました。



舞屋町 島田建盛

今回の法事を勤めるに合わせ、前住職と前坊守の法名軸ができました。これは福井で「孫いち」というお店を経営しておられる畠中の石川弼美さんが、掛け軸の技術を生かして作り、寄贈して下さいましたものです。法名だけでなく写真付きなので、故人の面影を偲ぶことができ、法事にふさわしく有り難いものです。



前住職 23 回忌、前坊守 17 回忌法要によせて

前住職は明治四十二年生まれで、平成五年四月十日、八十五歳で往生いたしました。明治、大正、昭和、平成と日本の激動の時代を生き抜きました。

昭和二年二月九日、大雪のため、庫裡が倒壊して両親と兄弟四人、合わせて六人が亡くなりました。前住職はまだ学生で、福井に下宿していたため助かりました。知らせを受け、雪をかきわけて寺の本堂にたどり着くと、六つの棺が並んであったわけです。その時の気持ちは、想像を絶するものがあります。

戦時中は兵隊にとられ、その間の寺役は、寺の門を入ると左手に立っている石像の引退した住職が勤められました。

戦後は、まだ日本が経済的に苦しい中、古くなった庫裡や台所の建て替えにとりかかり、現在の建物のすがたに整備されました。そして、昭和三十七年には、ご門主ご親修で親鸞聖人の七〇〇回御遠忌を勤めました。

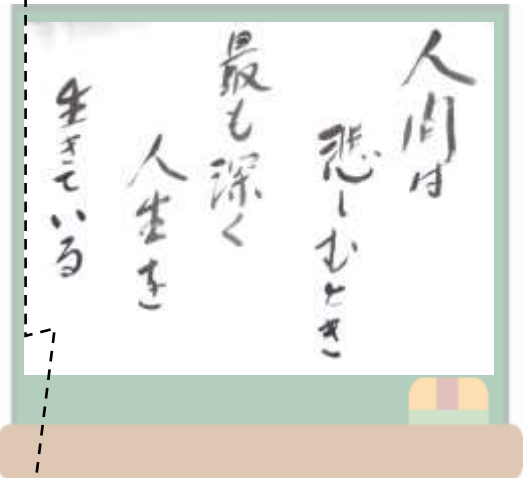
二十三年が経ちましたが、目に浮かぶのは難しい仏教書を読み、お同行に説教をしている姿です。八十五年の生涯は、本当に住職一筋の、仏法護持に力を尽くされた一生でありました。

前坊守は、平成十一年五月二十八日、九十歳で往生いたしました。明治四十三年に、福井市郊外、小稲津の本願寺派光福寺に生まれ、雪深い武周の地へ興して来て、さぞ苦労されたことと思います。料理をすることが得意で、門徒さんもうろこばれたことと思います。

二人とも、自坊でなくなりました。前住職は、武周の方々に看取られながらの往生でした。寺をまもり、仏法を護持して下さいました前住職、前坊守のご苦勞を偲ばせていただきたいと思っています。

(住職)

山門揭示板



私たちはこの一生を喜びや幸せでもって押さえよう
とします。結婚生活、子供や孫の成長、友だちとの温泉
旅行など。

しかし、このような喜びや幸せは長続きはしません
し、必ず崩れるものです。私たちは長い人生のなかにお
いて誰しも、思いがけない苦労や悲しみ、孤独に出くわ
さなければなりません。

このような苦と楽の世界を行き来するのを迷い（生死
しょうじ）の世界をいい、生死の世界を生きるものを凡夫
といいます。凡夫とは憎い、可愛い、欲しいの三毒の煩
悩に縛られて生きる者です。私たち人間は知性や理性を
もち賢い存在と思つていますが、仏法聴聞によって、凡
夫の身と知らされるのです。如来さまの大悲によつて凡
夫として呼びかえされたところに、私たちは初めて人間
として生きる悲しみ、苦悩が感覚されるのです。

そして生きることの悲しみやいのちの厳肅さに触れ
たところに手が合わされ、お念仏が申されるのです。

（住職）

行事予定（平成27年度）

6月中旬 本山差し向け布教

14、15日 西雲寺

16日 安田地区（お宿・末定高領さん宅）
17日 本堂地区（お宿・八木健二さん宅）

布教使 神戸 清原 純師

7月10日 11日 永代経

布教使 佐々木和雄師

11日はバスが3台出ます。

おとぎがふるまわれます。

10月17日 18日 19日 報恩講

布教使 奥田順誓師

18日はバスが3台出ます。

おとぎがふるまわれます。

11月27日 ご本山御正忌報恩講

団体参拝

西雲寺からバスを出します

11月28日 29日 30日 御正忌報恩講

29日はおとぎがふるまわれます。

布教使 野世信水師

12月31日 除夜の鐘（どなたでもどうぞ）

1月1日～3日 お年頭

3月 春分の日 世話方集会

どうぞお参り下さい

発行

真宗仏光寺派 専念山 西雲寺

住職 護城一寿

筆頭総代 吉川芳弘

編集責任者 護城一哉

〒910-3523 福井市武周町5-2

電話 0776-97-2138

メール kmgojo@mx3.fctv.ne.jp

ホームページ <http://arukou.net/>

次世代の方、分家された方に！

お寺から郵送いたします。どうぞ
ご遠慮なくお申し出下さい。

みなさんの声 大募集！

原稿や作品はもちろん、ご意見、
ご感想など、どしどしお寄せ下さい。
郵送でもメールでも構いません。お
待ちしております。